

平成29年度 高知大学研究顕彰制度授賞式

《研究功績者賞、若手教員研究優秀賞、大学院生研究奨励賞》

この研究顕彰制度は、優れた研究を行った者個人を学長が表彰することにより、研究業績者、若手教員及び大学院生の研究意欲の高揚を図り、もって本学における研究の活性化と一層の発展を目指すことを目的としています。

平成29年度は、今後の活躍の発展性が期待される研究者として、研究功績者賞3名、若手教員研究優秀賞2名、大学院生研究奨励賞3名の方々が受賞されました。

■ 授賞式 日 時：平成30年3月19日（月）16：00 ～16：30
平成30年3月28日（水）16：30 ～17：00
場 所：学長室

■ 受賞者

《研究功績者賞》

はらだ てつお
原田 哲夫 55歳（教育学部門 教授）

原田氏は、これまで、100点を超える原著論文・総説論文を出版し、（1）アメンボ科昆虫を対象とした生理・生態学（2）幼児・児童・生徒の生活リズムと睡眠習慣についての疫学的研究（3）生物分野における研究成果から新しい教材を開発し効果を検証する研究の3つの分野の研究を展開してきた。これら3分野におよぶ地道な研究の成果が、多数の原著論文・総説論文・著書として結実し、高知大学の文理融合型研究を牽引している。

また、2017年8月には「平成28年度「食と教育」学術研究報告会」において、優秀賞を受賞するなど、教授として大学運営の重責を担いながらも、研究を精力的に進めていることから、研究功績者賞にふさわしいと委員一同が合意した。

いわさき やすまさ
岩崎 泰正 63歳（臨床医学部門 教授）

岩崎氏は、長年にわたり視床下部・下垂体ホルモンによる内分泌代謝臓器の調節機構を生理学、分子生物学、および臨床研究など多彩な切り口から解析し、生活習慣病の病態解明に繋がる数多くの英文論文を発表しており、その中には、一流英文雑誌の論文が多数含まれるなど、高知大学の研究面における存在感の発揮に大きな役割を果たしてきた。

さらに日本神経内分泌学会筆頭理事、日本甲状腺学会理事（展開医学担当）、2つの厚労省難治性疾患克服研究事業研究班班員として、学会運営や診療ガイドライン作成にも積極的に関わってきた。

これらの長年にわたる業績が評価され、平成28年には日本神経内分泌学会の「学会賞」、および日本下垂体研究会の「吉村賞」という、各々の学術団体を代表する2つの学会賞を連続して受賞しており、研究功績者賞にふさわしいと委員一同が合意した。

かわの たかし
河野 崇 45歳（臨床医学部門 准教授）

河野氏は、術後神経・認知機能障害の病態機序解明を対象とし、行動解析から分子生物学的解析に至る様々な手法を駆使した研究を展開し、世界的な業績を着実に上げ続けている。これらの成果は、Anesthesiology誌のEditorial Viewで取り上げられた他、特別講演、シンポジウム、および教科書の執筆を行っており、国内外に広く受け入れられている。また、研究を通じた教育においても若い世代の研究者を多く育てている。

ここ数年間の国際的レベルの一連の研究業績が日本麻酔科学会で高く評価され、今年度は日本麻酔科学会の最高の賞とされる「山村記念賞」を受賞しており、研究功績者賞にふさわしいと委員一同が合意した。

《若手教員研究優秀賞》

ふじしろ ふみと
藤代 史 38 歳 (理学部門 講師)

藤代氏は、機能性セラミックスを対象とした物質合成と物性評価に関する研究を行ってきており、なかでも、CO₂吸収セラミックスの平衡熱力学的評価および反応速度解析についての研究は、多くの研究者から高い評価を得ており、学会誌への特集解説記事の寄稿や研究会での招待講演、CO₂吸収セラミックスに関する研究論文の査読を行っている。

さらに、日本熱測定学会より、熱測定に関する先導的、開拓的な優れた研究業績を挙げ、研究のさらなる発展が期待される若手研究者へ与えられる奨励賞を受賞している。加えて、45 本の査読付き原著論文 (うち筆頭著書 22 本)、1 本の単著の和文総説、5 件の招待講演を発表するなど活発な研究活動を行っていることが高く評価されており、今後の研究活動が期待される。

しみず たかひろ
清水 孝洋 39 歳 (基礎医学部門 准教授)

清水氏は、中枢神経薬理学を専門とし、ストレスに対する生体反応 (ストレス反応) の制御機構を、特にストレスを受容する脳に着目して研究をおこなってきた。これまでに、ストレス反応の 1 つである交感神経-副腎髄質系 (SA 系) の脳内賦活制御機構を、ストレス反応に関連する神経伝達物質との関連で研究し、筆頭または責任著者として既に 20 報近い英文原著論文を発表している。それらの成果は国内外で極めて高く評価され、第 24 回日本排尿機能学会の学会賞 (論文部門) 受賞、さらには排尿研究の世界的権威 DIOKNO-LAPIDES ESSAY CONTEST にて 2 年連続受賞 (2016 年グランプリ・2017 年準グランプリ) している。

また、自身の専門領域にて着実に研究成果を挙げるのみならず、新しい研究領域にも積極的にチャレンジし、国際的にも注目度の高い研究成果を残しており、今後の研究活動が期待される。

《大学院生研究奨励賞》

かみじま とよまさ
上島 豊正 28 歳 (教育学専攻 修士課程 2 年)

上島氏は、平成 26 年から現在に至るまで、高知県内の芸術文化活動へ積極的に関わり、複数審査制公募展やコンクール等で数多くの研究業績をあげている。特に顕著なものとして、平成 27 年の「第 10 回 Concours des tableaux」での最優秀賞受賞、「第 69 回 高知県展」での特選受賞及び高知県美術振興会奨励賞受賞、平成 29 年の「アートアニュアル vol.1.5 「明日をひらく表現」香美市立美術館企画展」出品がある。

さらに、個人の研究と並行して、高知県内の芸術文化の推進事業にも積極的に関わり、地域に根差した実践的な芸術文化活動を継続するなど、活発な研究活動を行っていることが高く評価されており、今後の研究活動が期待される。

おおした こうき
大下 紘貴 23 歳 (農学専攻 修士課程 1 年)

大下氏は、アーキアにおける MutSg 機能ホモログを同定した研究成果を、生化学論文として欧州生化学会連合が発行する *FEBS Journal* に筆頭著者として報告している。更に、発表者として既に三度国内学会で発表を行っている。学部生時代も、「2016 年度日本農芸化学会中四国支部学生奨励賞」や「2016 年度高知大学卓越した学業等成績優秀者授業料免除者」を受賞している。現在も、「巨大ウイルスにおける新規 DNA ミスマッチ修復機構の解明」という壮大な研究課題に日夜取り組むなど、活発な研究活動を行っていることが高く評価されており、今後の研究活動が期待される。

はやし かずさ
林 一沙 23 歳 (農学専攻 修士課程 1 年)

林氏は、2 年間一貫して、青枯病菌の病原性に関わる細胞間情報伝達系について解析を行っており、独創的にかつ経験に裏付けられた研究戦略力は、青枯病のみならず、植物細菌病の病原性機構研究に新たな潮流を生み出している。また、植物病原細菌のみならず、動物病原細菌でも類を見ない、バイオフィーム形成に関わる、クオラムセンシングと連動した細菌細胞間情報伝達機構を明らかにした。これにより、「生命分子システムにおける動的秩序形成と高次機能発現」について、「細菌の細胞内/細胞間におけるシグナル伝達の動的秩序に基づく細菌細胞の集団構造学」という新たな研究分野を創設するきっかけを作った。

また、90 年の歴史ある日本細菌学会の総会にて、歴代最年少の優秀発表賞を受賞するなど、活発な研究活動を行っていることが高く評価されており、今後の研究活動が期待される。